

映画『しろばんば』

(1962, 日活, モノクロ, 滝沢高輔監督; 1982年11月1日, 関西朝日系放送分):

修士論文序章——修士論文のマージナル・ノートより

林 田 雅 至

(註: この一文を執筆するにあたり, 井上靖の同題原作を随時参照しているが, ここで は映画と原作の相違点については触れない)

I-i ナレーターによってしろばんばの説明が施されることで映画は始まる。その意味は“白い老婆”であり, 夕闇のたてこめ始めた空間を綿屑でも舞っているように浮遊している白い小さい生きもの(精霊?)。真っ白というより, ごく微かだが青味を帯びている。村の子供たちが, 空に向かってそれを追う姿は虚空をうち, 悪霊を威嚇する呪師(シャーマン)あるいは呪医(メジマン)を連想させる。子供たちは, それぞれ各自の家に呪文でもかけられたように吸い寄せられて行く。

時は大正4, 5年(1915-16)。舞台は伊豆天城山湯ヶ島の一村。伊上家は, この村落の俗界の鎮守的存在であり, “上の家”(上が神と同音であるのも見逃がせない)と言われる。主人公洪作の祖父文太, 祖母たねを中心とするこの本家に対し, 曾祖父辰之助の妾, おぬい婆さんは分家を与えられ, とは言え洪作と2人きり寂しく, 世間の悪評を背負って土蔵暮らしを続ける。妾が分家を与えられたと言っては村人から白眼視され, 一方本家にとっては不具戴天の仇敵, 腹黒い女なのである。それ故にこそ, 洪作の母七重が妹小夜子を妊り, 一時的におぬい婆さんに洪作を預けた時(父捷作は軍医で当時静岡勤務), おぬい婆さんにしてみれば, 内心洪作の家に於ける自分の不安定極まる地位をもっと確りしたものにするため, 両親から洪作を人質として取り上げるといった気持もないではなかつ

た。洪作, 5, 6歳の頃である。もちろん, 世間も, 上の家も婆さんに“人質取り”と渾名を冠することに躊躇わない。しかし, 小学校一年生になる今の洪作に, おぬいは情を寄せ, 眼に入れても痛くない程の可愛がり様であり, 妾でありながら分家を頂いたという謙虚な気持からであろうか, 惜しみなく愛を与えているのである。偽わざるは純粋無垢な子供洪作の反応であり, おぬいに懐き, 父捷作の現在の任地である豊橋(15師団所属)の両親の元を訪れた時, いかにも居辛そうである。そそくさと, 湯ヶ島に帰ってくる。

さて学校では, 校長石守森之進は洪作の父の兄であり, 洪作の伯父にあたる。また学期末の通知簿をもらう日など上の家の子であるが故, 袴をはく。袴をはくのは, もう一人上の家の洪作と同年であるみつの二人だけである。かくしてまた, 回りの評判を呼び, 洪作自身特別視されることがほとんど嫌になってしまう。良きにつけ, 悪しきにつけあらゆる側面において洪作はこの村落共同体の口の端のぼる存在であり, 頼みはおぬい婆のほんのりと暖かい愛情である。しかしこのバランスは極めて不安定であり, ややもすれば悪い方へと傾く。そこに救い主の如く立ち現われるのが, 沼津の女学校を卒業し, 洪作が2年生になる時小学校の教諭に就く母七重の妹, さき子である。生来引込み思案で恥ずかしがり屋の洪作は, 仄かな淡き恋心を打ち明けるには至らない。さき子の姿を母の七重ではないかと思ひ, その歩き方は母にそっくりと合点する。このようにして同時に, 居辛かった両親の家での従来うまくいかなかった母へ

の愛情をも培っていく。

さき子は同僚の中川基(5年受持)先生と仲良くなる。中川は隣村の中狩野村の医者の子で東京の大学卒業後、実家でぶらぶらしていて教師の数が足りないからという役場からの依頼で、2年程前から代用教員としてここ湯ヶ島小学校に勤務しているのである。洪作のお気に入りの先生でもある。洪作の心境としては、神社の本殿廻廊でさき子と中川基の2人が、洪作のことは忘れて熱心に話していることが嫉しくもあったが、やがてさき子・中川2人の恋愛関係が村の噂となり、洪作はさき子同様に、噂によって傷つけられているように思うほど、さき子への思慕の念は消えず、お気に入りの中川先生のさき子への愛を見守る形で自分の淡き思いを達成している。同時に、母への愛はますます浄化されていく。11月中旬の運動会、3年以下の長距離競争で洪作は5等になり、おぬい婆、さき子、中川先生から拍手喝采を浴び有頂天である。先の淡き思い達成の巧みな象徴的メタファーと看做すことができよう。

冬到来が暗転となる。12月にはいって間もない頃から、さき子妊娠の噂が村落を飛びかう。この村落共同体にあっては、正月までのひどく退屈な時間を生き生きさせた噂であり、比較的閑暇な時期を充実したものにしたそれである。世間に肩身が狭く、さき子は12月の初めから学校を休み、上の家の2階の自宅に閉じこもりがちである。祖母のたねは時折浮かぬ顔をし、祖父の文太は四六時むっつりと押し黙っている。冬休み開始前日、中川基は半ば左遷されるかのように、半島西海岸の村へ転任する。洪作の心中は微妙である。さき子の犠牲となって自らこの学校を去って行くのだ、と思う。しかし、あらかじめ祝言は済まされている。

時は移り、5月の馬飛ばし(競馬)が行なわれた後、曾祖母おしな(辰之助の正妻)の死が訪れる。葬式の折洪作の母が来り、洪作は手放しで喜ぶ。母への浄化された愛の高まり

を示し、またこれは死の暗きイメージとコントラストをなす。葬式後洪作は3日間学校を休む。死霊を鎮めるあるいは祓うためであろう。この曾祖母の死は、実は前兆的メタファーの役割を演じている。つまり、事の次第はこうである。

死後1ヶ月程経った頃、洪作はさき子の躰が蒼白くなって痩せているのに気が付き、何となく心配になる。果然、不幸にもさき子は肺病を患うことになる。またしても世間の噂は絶えない。やがて、当時不治の病である肺病に苦しむさき子に憐れみを抱き、上の家は転地による快方を考え、不治ならば家族ともに暮らす方がよいと判断し、さき子は夜中追われるように夫中川の元へと去って行く。別れ際にさき子は洪作に、お前は他の子と違う、一生懸命勉強して大学に進まねば、と言葉を残す。洪作は一心不乱勉学に励む。これも淡き思いを抱きさき子の勧めだからである。

夏休みになり、さき子の訃報が届く。さき子の葬式の日、洪作は友達を連れ、真っ裸になって天城峠のトンネルを見に行く。なむまいだの念仏はさき子への追悼歌、死の鎮魂歌^{レイニウム}であり、焼けつく太陽の下、絶えることなく溢れ出る汗は、さき子の死霊を拭い去り、また洪作の悲しみを洗い流すのである。

I-ii 曾祖父の妾おぬい婆さん、人質と解釈される洪作、恋愛関係にあるさき子・中川基、妊娠するさき子、肺病を患うさき子、これらは村落共同体にとって噂の恰好の材料であり、それによって村民間の連帯意識も強化され、正に伝統的慣習の世界を醸し出している。この世界は、青白き生きもの、しろばんばで始まり、鎮魂歌なむまいだ(念仏)で幕を閉じる呪術的雰囲気とは決して無縁でなく、むしろ共鳴板の如く響き合う。人の思考をドグマ的でステレオタイプ化さえする効果を持つ。

II-i ここでさき子が肺病患者として夜村落を離れることについて、一言する必要がある。肺結核の化学療法は1943-44年ワクスマ

ン (S. A. Waksman) によるストレプトミセス・グリセウス (*Streptomyces griseus*) という土壌菌からの抗生物質ストレプトマイシン発見を待たねばならない¹¹⁾。ましてこの舞台となった湯ヶ島に当時 ツベルクリン反応・BCG 予防接種¹²⁾ があったとは考えられない。日本では大戦前約20万人の死亡者を出し、死因順位第1位であり、大正8年(1918)にピークを迎える、明治43年(1910)から大正9年(1920)にかける期間は肺結核が日本を席捲した時期である¹³⁾。近代医学の見地に立つことのできない当時の人々が伝染病肺結核を宗教的な意味の《汚れの観念》で把握していたと考えるのはさほど難かしいことではない。

II-ii 西洋に目を転じてみよう。古くユダヤ人の間ではレプラ(流行病)は人々に忌まれる病気で、人間の不義な行為(罪)に対する神の忿怒(神罰)という図式で宗教的観点から眺められる。そしてレプラ患者は社会から完全に放逐される(「レビ記」13,4章)。こうして広義に流行伝染病患者の隔離という手続きが開けてくることになる。ただし近代的な意味での伝染性^{コンタジオン性}が認識されていたと言うよりは、むしろ宗教的な《汚れ》を厳しく遠ざける趣旨に出たものであることは見損じてはならない¹⁴⁾。

中世末期黒死病(1347-52)が中央ヨーロッパに蔓延し、その波はポルトガルに1348年春から49年にかけて押し寄せる。死亡率は約100%であり、人口の30~35%が減少する¹⁵⁾。向後、19世紀90年代北里柴三郎およびフランスのイエルサンがそれぞれ独自にその病原菌を発見する¹⁶⁾まで、ポルトガルに限定すれば1899年細菌学者リカルド・ジョルジ(Ricardo Jorge)(1858-1939)がイエルサンの発見した病菌を確認する¹⁷⁾に至るまで、医術は無力である。

モンペリエ医学校、学頭(大法官)を務めたことのあるヨハネス・ヤコービ(Johannes Jacobi)(1315頃-84)¹⁸⁾が1348年モンペリエ

を襲った黒死病での貴重な体験¹⁹⁾(通例当時の医者は患者を置き去りにして逃げたものである。黒死病が発生すれば、迅速かつ遠隔地に逃げるのが習いであった¹⁰⁾。逃げるのも《汚れ》から遠ざかるという宗教的な意味がある。)を生かし、1357年『黒死病養生訓』を物する¹¹⁾。瞬く間に世間で評判を得、換骨奪胎した翻訳・翻案^{マヌスクリプト}本が続々と現われる。ポルトガルでは、リスボン大学(Studium generale)神学・論理学・自然学で教鞭をとったルイス・デ・ラス僧(Frei Luís de Rás)¹²⁾が15世紀末葉、ポルトガル人が読めるように、否誰かに読んでもらって容易に理解できるように翻訳する。上梓されるのは1495-96年のことである¹³⁾。

神罰説が本流であり、人の罪の懺悔こそが疫癘の第一の良薬である。典拠としているのは、神のダヴィデに対するサタン(経倫の器)による試練を扱う、旧約「サムエル後書」24章及び「歴史志略上」21章である。ダヴィデの神への不信(罪)により、イスラエルの民7万人が死亡するという3日の疫病が天罰として下り、ダヴィデが悔悟し、主の祭壇を築き、燔祭(牛)・酬恩祭によってはじめて赦罪され、災いは停止する¹⁴⁾(山口昌男風に言えば、“神話及び象徴に内在する究極的論理=犠牲の論理の然らしむるところ”なのである¹⁵⁾)。

ポルトガル第11代国王《雄弁家》の渾名を冠するドン・ドゥアルテ(D. Duarte)(1391-1438)は青年期母、英ランカスター公爵家ドナ・フィリパ(D. Filipa)(1359-1415)を黒死病で失ない、バターリャ修道院で執り行われた父ドン・ジョアン1世(D. João I)(1357-1433)の葬列にも当時その地に流行していた黒死病のため出席できない。1437年8月末リスボン及び市周縁部に黒死病死者を出し、遂には翌年発生した疫病^{ペスト}の犠牲^{いけにえ}となって他界する。生前轍軻数奇なる身の上にあったドン・ドゥアルテが、1438年を迎えようとする頃になって『忠実なる顧問(Leal Conselheiro)』と題する作品を執筆する¹⁶⁾。その第54章で

は、黒死病養生訓話が語られる。先の『黒死病養生訓』と同じ典拠に基づき神罰説・告解勧告を叙べる。しかし第一義的に《逃げる》ことを最良策と考えている。また、黒死病患者の市（共同体）外追放・市外療養・隔離が説かれている¹⁷⁾。以降、《汚れの観念》に根ざす公衆衛生学的な国家政策の一環として種々な防疫措置（黒死病患者用の恒久的病院施設¹⁸⁾、隔離所^{クワレゼント}の設定¹⁹⁾、港の閉鎖^{クワランタイ}、検疫期間の制定²⁰⁾等）が取られるようになる。

II-iii 話を『しろばんば』に戻し、さき子の夜逃げは次のような宗教的・象徴的解釈を可能ならしめるであろう。

上の家は村落共同体の鎮守的存在であるが、そこに汚れた肺結核患者さき子（上の家の者）が居ることは、上の家を汚してしまうだけでなく、守護者たるべき上の家を中心にする村落共同体の精神的安寧をも危うくしてしまう。汚れた対象・さき子が共同体から放逐される必要性が生まれ、現実化する。こうしてこの村落は以前の平穏無事な日常生活を回復することができたのである。

II-iv さて、この映画『しろばんば』は上記の如く伝統的慣習的世界（村落共同体）と呪術的雰囲気をつくり織ったタペストリーの如く、古風なイメージに終始する、ネガティブに捉えればダイナミズムに乏しい、ステレオタイプ的で閉鎖的な世界なのであろうか。

さき子が肺病を患ってからというもの、おぬい婆さんの諫言で洪作は容易に上の家に近づくことができず、現実化されない見舞いとその達成願望の間に明らかな精神的ギャップ（齟齬感）が見られる。

ある日、人目を忍んで上の家に来ると幸い誰れもないらしい。さき子のいる2階へと上がり、部屋へ入ろうとするがさき子は許さない。衾越しの問答の末に、結局中には入れてもらえず、洪作は衾に凭れ掛かるように廊下に膝組みをして坐り込んでしまう。瞬時の沈黙を破り、彼は嘗ってさき子の勧めるまま仕方なく歌ったことのある「箱根の山は天下

の嶮」を口に出し歌い始める。それを聞きつけてさき子も後から追うように、やがて2人で歌うというシーンがある。

母のイメージと二重写しにしながら、淡き思いを抱く洪作は是が非でも、病床のさき子を見舞いたいという欲求で満ち溢れている。得たチャンスを生かし、純真な子供心から正に自発的に生まれ出た産物がこの歌であり、彼の満足感が得られただけではなく、どれ程かさき子が心安まる思いをしたかは推し計ることができる。

このシーン、映像的にも優れている。坐り込んだ洪作の顔をクローズ・アップし画面左に位置し、衾は白っぽい感じであり、それを背景にして洪作の顔色も白く感じられ、全体として色彩的に白透明になっている。洪作の歌を追いかけるようにして歌い出すさき子の顔がやはりクローズ・アップとなり画面右を占める。衾のこちらとあちらが交互に映像となり、歌が進むにつれてこの2つの映像は重ね合わされ、そこに画面左に洪作の顔、右にさき子の顔が同時に映し出されるのである。内容の点において、洪作が歌を歌い出すという自発性は、作品全体を流れる伝統的慣習的世界（閉鎖的世界）に特有の没個性と対照^{コントラスト}をなしている。ここに映像がその内実を伝達する形式として、内容と相合し、見事な調和を造り上げている。この映画の頂点をなすシーンであり、観る者が思わず知らず、映画の中に吸い寄せられるシーンである。

●追記：この作品は大正4、5年（1915-16）ということである。この時期、日本は愈々帝国主義・軍国主義化を強めていく。日清（1894-95）・日露（1904-05）戦争を挟んで1901年八幡製鉄所を建設し、軽工業から重工業への転換期が訪れ、1906年には鉄道国有法が出、また満鉄が設立される。本格的な資本主義化の時代到来である。1911年袁世凱の指導下、三民主義に根ざす辛亥革命が起き、中華民国政府が立つ。その矢先、1915年日本は中国に対し21ヶ条の要求を出し、大陸への進

出を計る。戦勝気分が酔う日本とは言え、社会問題は絶えない。1897年労働組合期成会発足に続き、足尾銅山鉱毒事件(田中正造)が社会問題化する。1910年には幸徳秋水ら社会主義陣営が大逆事件という災難に見舞われる²²⁾。大正4,5年,社会不安は包み隠せない。

洪作の父が軍医であることの意味がこれらのコンテキストの中でどういうことになるかは目下疑問符である。

III 最後に修士論文のテーマについて簡潔に触れ終章としたい。

題目は次の通りである:「近代ポルトガルにおける聖人信仰の社会的意味、『黄金伝説』に現われる聖セバ스티アヌスの場合」。

黒死病発生以来ヨーロッパは幾度となく疫病が再発し人々は苦しむ。近代医学的な意味での伝染病としての黒死病というパースペクティブが実証的に確立されるのは、前述のように19世紀90年代になってからである。それ以前は病理学と言え、液体病理学であり、それはヒポクラテス(B.C. 500頃-B.C.428頃)において基本的性格が形成され、ガレノス(A.D. 129頃-199)によって思弁に墮し、中世修道院医学の中でまず啓示的に解釈され、体系・理論癖が目立つ解剖学不在のアラビア医学にその身を晒し、典拠主義を抜本的特性とするスコラ学的方法で濾過され、遂に実証学的性格はすっかり喪失されてしまい、空想的演繹論理がその方法論となる。これがスコラ医学の完成(14-15世紀)であり、黒死病養生訓の立脚する基盤である²³⁾。実地抜きの医学の無力さは認めざるを得ない。

興味深いのは聖人崇拜の問題である。

東洋で発明された紙がアラビア人を仲介者としてヨーロッパに伝えられるのは1200年頃であるが、伝統的な羊皮紙・犢皮紙と競争しなければならぬ。しかし水車の動力によって、書きことばを押印するのに適した、薄くて、なめらかで、またしなやかな材料を生

む。1336年までにドイツではすでに水力を利用した製紙工場がある。活字印刷術が発明されるまでにまだ100年程もある²⁴⁾。ここに初期木版画が生まれてくる²⁵⁾。その制作地は、高ダニューブ溪谷のある西南ドイツと西ドイツ地方とフランドル、フランス、スイスに隣接する200から400キロメートルの幅をもち、ライン河を軸とするアルプスから北海に至るまでの地域である²⁶⁾。通常この名称で呼ばれるものは、時代的には揺籃期本の時期までずれこみ1500年頃までを含む²⁷⁾。その総数は3000から4000枚と数えられ、今日では珍重されている。その大部分はユニカで、同一原版になる刷りが3部あるのは非常に稀。それは印刷数量が少なかったためでなく、今日最も高価な古切手などにその例を見るように、多く刷られたために反って失われてしまったのである。当時の数量は上の数字よりはるかに多かったと考えてよいだろう²⁸⁾。現存するこの初期木版画のおよそ80%は宗教図像で占められていて²⁹⁾、中に黒死病除け聖人護符(聖物)が見える³⁰⁾。このケース、特に人気を博した聖人が聖セバ스티アヌス(図版1)であった³¹⁾。ここではその理由如何は敢えて問わぬとしても、中世に確立した生の理想としての聖者の高き観念であった聖人崇拜³²⁾が、黒死病発生とともに極めて民間信仰の臭いのするアニミズム的護符という形式で、人口に膾炙していくプロセスは瞠目に値する。日本において本地垂迹説をもって地藏菩薩が春日明神の本地として、やがて塞神を嚆矢とする道祖神と結びつき、地獄における救済だけでなく、戦場・病氣、その他困った時など現世における苦悩を救済する親しみ深いほとけ³³⁾としての役割を演ずるに至る類比的プロセスを私たちは連想してしまう。

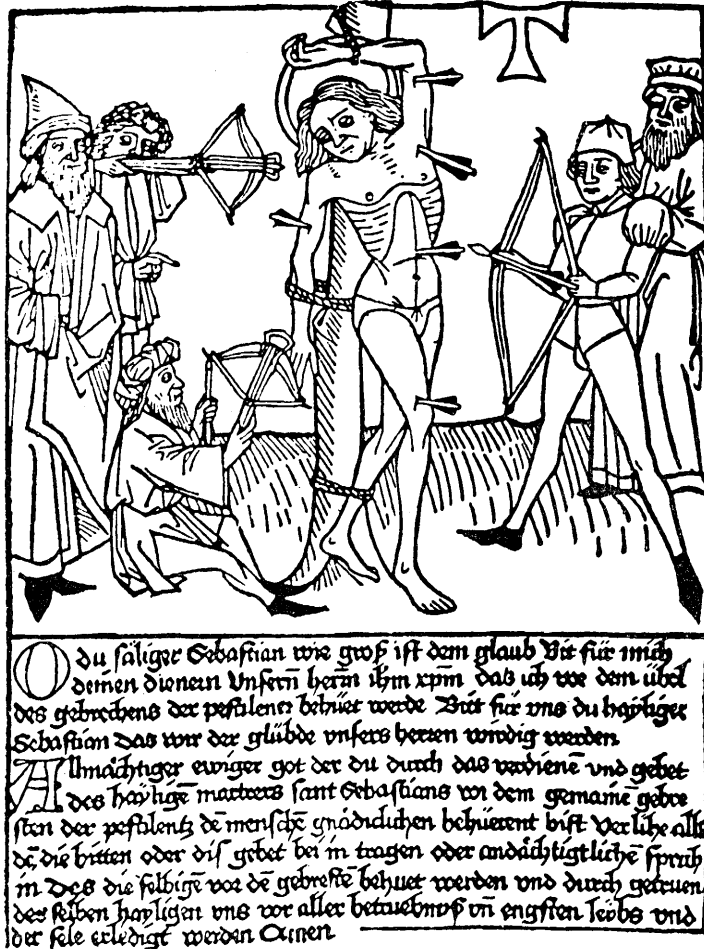
さて、特にポルトガルにおいて、聖セバ스티アヌス崇拜がどのような形で時代とともに伝播され、受け継がれていったか。

一方、先に書いたように、〈汚れの観念〉

から発する防疫措置対策を個別に具体的かつ
実証的に論述してみようという試み、これが

修士論文のテーマとなっている。

1982年11月中旬 摺筆



図版1 黒死病除け 聖セバスティアヌスの殉教護符 (1440年頃)、
ロンドン Guidhall Library コレクション³⁴⁾。

さし絵の下には、聖人への黒死病除け祈禱文(要するにお呪である)
が見える。巡礼地、教会、修道院等で安価に販売されるこの種の護符
は、室内の壁、扉、調度品に貼られたり、また頻繁に櫃・大型入れ物
の蓋に貼りつけられ、旅先で携帯用祈禱台の役割を演じる。さらに、
帽子・衣服の裏地に縫い込んだりされた。こうして中世・近代のヨー
ロッパの人々は、汚れたる黒死病から保護され宗教的に安堵していた
のである。言ってみれば、宗教の疾病保険だった³⁵⁾。

註)

- 1) フランク・B・ギブニー編集『ブリタニカ国際大百科事典』, 東京(ティビーエス・ブリタニカ), 1973, vol. 6, p. 527-29.
- 2) 3) 下中邦彦編集『世界大百科事典』, 東京(平凡社), 1981, vol. 9, p. 241-47.
- 4) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』, 東京(岩波書店), 1977, p. 182.
- 5) Mário da Costa Roque, *As Pestes Medievais e o «Regimento Proueytoso contra Ha pestenença» Lisboa, Valentim Fernandes (1495-1496).*, Paris, 1979, p. 117-40.
- 6) 川喜田愛郎, 前掲書, p. 1022.
- 7) Joel Serrão, *Dicionário de Historia de Portugal*, Lisboa, 1971, vol. II, p. 62; Ricardo Jorge, *A Peste Bubónica no Porto*, 1899, in Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 20, 28, 497.
- 8) Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 271-94.
- 9) *ibid.*, p. 274, 327.
- 10) *ibid.*, p. 224-26. 当時の医者は普通 físico(ポルトガル語)で, 古代ギリシア哲学以来の自然学(physica)=天文学・気象学・生物学・医学から出た言葉である。自然学は自然哲学とも呼ばれる。
- 11) *ibid.*, p. 62. によれば, 正確な年は分からない。1357年というのは, A.C. Klebs & Eugénie Droz, *Remèdes contre la peste; fac-similés, notes et liste bibliographique des incunables sur la peste*, Paris, 1925. に従う仮説であり, 原^{フネスクリプト・フキスト}典は仏語韻文であると解釈する。これに対し E. Wickersheimer は異を唱え, この韻文化されたテキストは, 中世ヨーロッパ最も流布した黒死病養生訓であるヤコービのラテン語原典の仏語版に過ぎない, と言う。ただし最古のラテン語原典の存在は定かではなく, 演繹の想定(仮説)であると思われる。E. Wickersheimer, *Dictionnaire biographique des médecins en France au Moyen Age (2 vols)*, Paris, 1936. Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 290-91.
- 12) 生没年未詳。Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 305-12. 姓名 Rás はポルトガル風ではなく, 仏の有名な毛織物工業地帯フランドル地方にある, タペストリー(綴織り)製造都市アラス(Arras)と何か関係があろう。
- 13) Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 311, p. 355-74.
- 14) *ibid.*, p. 323.
- 15) 山口昌男『歴史・祝祭・神話』, 東京(中公文庫), 1978. 同『文化と両義性』, 東京(岩波書店), 1975. 同『道化の民俗学』, 東京(新潮社), 1975. 同『道化的世界』, 東京(筑摩書房), 1975. 等を参照した。
- 16) Joel Serrão, *op. cit.*, vol. I, p. 855-57, vol. II, p. 63.
- 17) Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 143-45, p. 170-71.
- 18) *ibid.*, p. 179-86; Joel Serrão, *op. cit.*, vol. I, p. 234-36.
- 19) Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 173-74, p. 190-97.
- 20) *ibid.*, p. 186-90.
- 21) *ibid.*, p. 171, p. 186-97.
- 22) 宇野俊一『日清・日露』日本の歴史 第26巻, 東京(小学館), 1976; 鹿野政直『大正デモクラシー』日本の歴史 第27巻, 東京(小学館), 1976. を参考にした。
- 23) 川喜田愛郎, 前掲書, p. 50-51, p. 62-65, p. 78-79, p. 110-13, p. 128-29, p. 152-53, p. 164-72, p. 255.
- 24) L. ホグベン『コミュニケーションの歴史』, 東京(岩波書店), 1958 (Lancelot Hogben, *From Cave Painting to Comic Strip, A Kaleidoscope of Human Communication*, London, 1949), p. 106-07.
- 25) 坂本満「版面概論」(ジャン・アデマール, 坂本満編集解説『初期木版画』世界版画パリ国立図書館蔵 1, 東京(筑摩書房), 1978), p. 9; Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 232, p. 243-47.
- 26) 坂本満, 前掲論文, p. 10; Mário da Costa Roque, *op. cit.*, p. 245.
- 27) 坂本満, 同上, p. 9; M. da Costa Roque, *op. cit.*, p. 232.
- 28) 坂本満, 同上, p. 9; M. da Costa Roque, *loc. cit.*, p. 247.
- 29) 坂本満, 同上, p. 10.
- 30) L. ホグベン, 前掲書, p. 102, 113; M. da Costa Roque, *loc. cit.*, p. 239-43. cf. ホイジンガ, 堀越孝一訳『中世の秋』(上), 東京(中央文庫), 1976, p. 345-54; ラブレール, 渡辺一夫訳『第一之

- 書ガルガンチュワ物語』, 東京(岩波文庫), 1973, p. 205-11, p. 347, p. 357.
- 31) M. da Costa Roque, *loc. cit.*, p. 247-55; ヤコブス・デ・ウォラギネ, 前田敬作・今村孝共訳『黄金伝説』(第1巻), 京都(人文書院), 1979, p. 256-66 (23聖セバティアヌス).
- 32) 林達夫『文芸復興』, 東京(中公文庫), 1981, p. 222.
- 33) 宮次男「特集 病気も地獄も怖くない・中世人生絵巻」(『芸術新潮』, 東京(新潮社), 1982. vol. 33, 11号), p. 20-53; 高取正男「地藏菩薩と民俗信仰」(梅津次郎編『地藏菩薩靈驗記絵・矢田地蔵縁起絵・星光寺縁起絵』新修日本絵巻物全集 29, 東京(角川書店) 1980, p. 41-52.
- 34) In M. da Costa Roque, *loc. cit.*.
- 35) *ibid.*, p. 246; 坂本満「版画概論」, p. 4-15 によると, この種の護符の最古のものは、『聖セバティアヌスの殉教』(1410年頃, ミュンヘン州立版画室 S. 1677) あるいは、『聖セバティアヌスの殉教』(1437年, ウィン, アルベルティナ図書館 S. 1684) である。
(はやしだ まさし ポルトガル文学・民俗学)

正誤表

頁	行(注)	誤	正
ii	5 (下)	でもなければならぬと考え ていますので	⇒ 削除
7	11) 3行目	アヌスクリプト	⇒ マヌスクリプト (ルビ)
	12) 1行目	ボルトガル風	⇒ ボルトガル風
	30) 2行目	(中央文庫)	⇒ (中公文庫)
10右	9 (下)	d'z'ue'	⇒ d'z'u'e'
	3 (下)	(o ₊ :)	⇒ (o ₊ :)
11右	18 (上)	d'z'ue'	⇒ d'z'u'e'
	7 (下)	sd'e.d'z'ix.aã	⇒ sd'e.d'z'ix.aã
16	15) 10行目	「音節末の	⇒ 「音節末の
17	14 (上)	Начальные	⇒ Начальные
19	タイトル	-СЯ動詞伴う	⇒ -СЯ動詞に伴う
20	表	献文	⇒ 文献
22右	5 (下)	<u>хочется такую</u> куклу	⇒ <u>хочется такую</u> куклу
21,23,25,27 柱		-СЯ動詞に伴う対格補語に ついて	⇒ -СЯ動詞に伴う対格補語に ついて
29右	11 (下)	codicia	⇒ codicia
42右	18 (下)	(こころみる,	⇒ (こころみる,
44左	6 (下)	「語構成	⇒ 「語構成
47左	2 (上)	シュワーベル	⇒ シュワーベン
	右 11 (下)	まずらお(「英雄」のルビ)	⇒ まずらお
48左	10 (上)	ケカティリナ	⇒ カティリナ
	12 (上)	マケナス	⇒ マエケナス
	右 3 (上)	以下、書名が慣用に反する切りかたとなっていることをお詫びし ます。同様に、50頁左 5行目 (上) も慣用に反しています。	(大平)
51左	22 (上)	СЛАВ ЯНИЗМ	⇒ СЛАВЯНИЗМ
52	《参考文献》		
	(1)	1974	⇒ 1949
	(3)	Избранные труды История ...	⇒ Избранные труды: История ...
	(4)	Русский Язык,	⇒ Русский Язык;
58	14 (上)	pp. 307-27	⇒ pp. 907-27
裏表紙 右肩		INNS	⇒ ISSN

